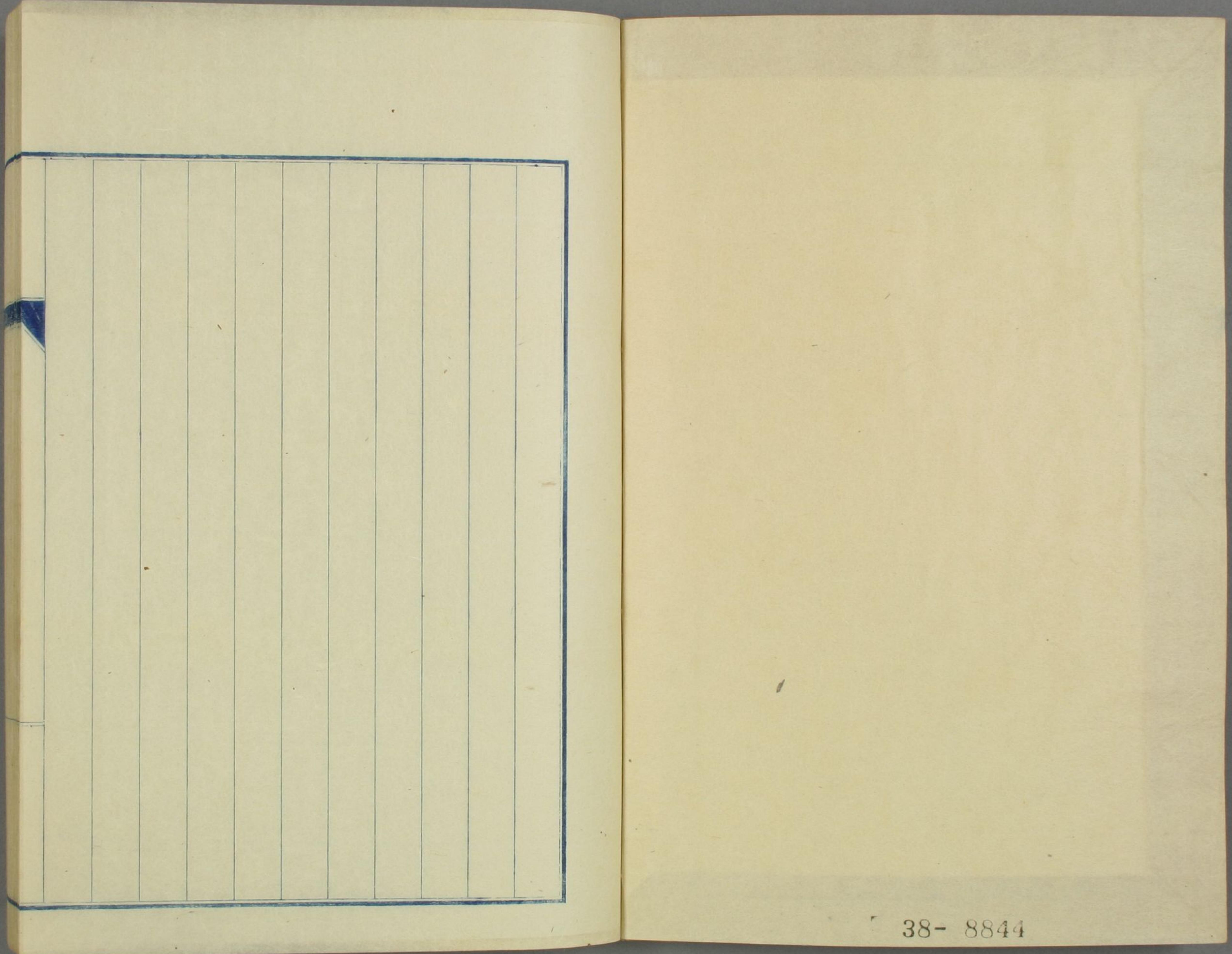


鐵網錄



特別  
14  
1919  
15

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



38- 8844

## ○

凌歛基、工正精巧、先秤量衆材輕重、然後造構、乃無鎚錘相負、揭基長高峻、常隨風搖動、而終無傾倒之理、魏明帝登之、懼其勢危、別以大材扶持之、樓即積壞、論者謂其輕主力偏也、操觚當作如是觀操觚十六觀

## ○馬郎婦

歸於金沙灘、施一切人滌、凡此交者、永絕淫念、死葬後、一梵僧來云、求我俗、振臂乃鏗子骨、僧以杖挑起、升雲而去、龜基瓦砾

○山資

南齊書云、王秀之為哥平太守、暮年謂人曰、吾山資已  
足、豈久留以妨賢路、按ナミニ山資と云ふ、今俗の詞の  
隱居料もいふう義はあらまじ、山資の字ハ稚本  
リ也云々

○船上

我邦の人彼方を載せまん所のあと、すぐて船載、船上  
船未をとて承す、是よりて往ナシテ彼邦のすま、船上  
とちくまことひを言譯してワタリと和漢せまし  
えんほりの音をすまし、船上とゆく、彼邦の地名も、  
酉陽雜俎曰、耶伽花、状如三脊、无葉、花色白、心黃

六瓣出船上とあノロ上

○收字

民俗の豐兒と夷神の神ニ、己身を隠しハ、かく  
馬うとモト、現ん物ト、ハア一とニテアリ、アレ即  
厥字の義、以家の往ルニ、和讃切、音獲、隠  
身忽出驚人之聲也ニテアノロ上

○壺壺

壺苦本切、音閩、再雅、窖中術謂之壺、廣雅、  
居也、詩大雅云、室家之壺、皇明世法錄曰、宮壺  
皇后所居也、ナムノハ清義をあつまえて記之  
バ、我邦の相壺、蕉壺、梅壺、梨壺などと称

トテテラ、トモサマシル、古ヤ庄妃の居る所やア、乃家  
の不景、さうば桐つ不吉つ不と、トキミ、キヨのつ森  
をもつておれ、トキミの昭徳多、つばと坪の多の義  
をも行の門うかとす、おも、根の訓アレ、長と云  
の義、えん坪のあきうしてそぞくとしの訓アレ、こん  
ハ壺の字アリ、壺の字アリ、死無子、ヤムルソリの  
孤切、奇胡、奠葬の類アリ、瓦器子、ヤムルソリの  
字アリ、こり壺の字アリと壺の字アリと見誤ヘ、壺の字  
のつばと坪の訓を、磁瓶の教の壺の字アリもてキモ、壺  
をハツボシ訓モ、大さき穴アリ、壺ハカスヒ訓アリ、  
按壺古文作田、格も作壺為正、壺古文作立篆

作壺楷作壺為正、固もこの壺壺のニキハ我邦の  
人々モレ、美邪の人民は鋸送レズ、下壺ト  
云人の名とすべ、下壺トモアレ、礼部該略ノハ  
壺ニキの字、下壺ハ人の名とあり、えん坪の字アリ  
言ふ事ナク、時キの字アリ、日上

○白月黒月

西域印度の四俗、一月を今アヒニツトナ一日、  
カリムモモを白月としナ、カリモ晦リモモを黒月ニ  
ナ、法苑珠林有見也、東波う月不研の鉢々不充々  
分黑白月とい一も此モと用ひテ、かの翁ハ佛  
ある深々けんき)

○爛 柯

柯を爛すといひて世の人まで圍棋を名す。このがくとの心思ひのんとも又琴を聴へども如きあり、鄒道元水經注云、晉王質伐木入信安縣室抜見童子四人鼓琴、質倚柯聽之既去柯爛去家已數十年と見ゆ。代文

○皇圓え御製の序を賜りしも唯一部古色皇圓え天子御製の序文を賜じちあらむ。御人皇帝一百一十有一代をあらわす。御内里と称しなむ。漢もを取るもと尊い。紫禁さうひて壹も況え也。世の儒も追はと名

まゆ中も実手を振ふるひての壽院懸寫う精力極りの甘い徳仰でござる。心し慕う。御内里御文庫ト納め給ひたる後ろよりさんへりていろがくの御覽のまえ云。朕於先生不見顏色、不通言語、而百年神交、如合符節。何之謂也。所視所言、所勤所蓄、庶幾乎其不差也。焉云。其一斑をり。代文

○乳名と屎乃字を用ひ

唐東野子曰、東莞多以屎、为兒女乳名、賤之所以責之。男曰屎哥、女曰屎妹、抑また其音圓の如く

まかりし風俗や行ふよけん、紀貫之の初名をい  
何お席とえ呼たる

○反魂衣

洁土を泥の手と古着を反魂衣とすけり右脇を質持  
きすることを畿内の賄風の薄侈コロスともてへ古着  
を反魂衣と云ふ。偶十才よりおも。——福庵漫考

○南天燭

鏡の裏面にすみ火燭を鑄す。此の事は人祀と  
象うる。南の羅とて難く就く。三卦九  
め尾天ハ乾とて坤とて二卦象也。美也。燭又  
火用とて乾とて坤とて也。燭とて飛とて美一とて多

うとうて鏡の裏とて鑄りて。日上

○文章軌範

本経屏平ニテ文革用仕し事中もととて  
今取りそしする所瓦ミ部とて多とひとて僅とて  
拂り去る如き方とていとひとてひとて僅とて  
年のちとて校行出来りとて見んに昇すとて限深とて  
いと若狭とて寫光とてく、送とんしちとて北流文章  
起れとて之とて化年の本意とて多とひとてやと  
字とて少とて慢とてとてもとてとてとてとてとてとて  
ハ不自由文章とて執一叶とて求めうとてうとて

○未通奉

雖岐祝へ渡とましまを水上とひを世すほと云  
うより高雲の音鈴と船と間か祝と上を兵士と  
云々准トと云とすけり船と車と万葉と未通女と告  
てりまじくまみえさうの歸といえぞやてあら難波  
か全未<sup>ミツ</sup>也揚<sup>アゲル</sup>も一也揚<sup>アゲル</sup>をとふととちくが  
よきらびらんとす、じとせ舊事と云吹る  
と云あはぬをす、じとせあはう、かかあくとくとく  
ハ考すとくとくとく水上の音も杜き歎<sup>タヒ</sup>り上

○不經紀

清土の似後<sup>シテ</sup>旅高いを經紀<sup>ヒヨウ</sup>と云ひもあまくま

高雲の音<sup>ヒノ</sup>用<sup>ヒテ</sup>葉<sup>ハ</sup>うばの本邦の高雲あきふ  
いの寐<sup>スミ</sup>一<sup>ミ</sup>を不<sup>ハ</sup>ま亂<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>ス<sup>ハ</sup>レ<sup>ハ</sup>く不<sup>ハ</sup>經紀<sup>ヒヨウ</sup>  
べし

○茶<sup>カ</sup>火<sup>ハ</sup>長<sup>カ</sup>たゞ

茶室の賀口<sup>カヒ</sup>をにぢり上<sup>ア</sup>と云<sup>ヒ</sup>賀<sup>カ</sup>口<sup>ヒ</sup>初<sup>ヒ</sup>のも<sup>カ</sup>此  
室<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>す全<sup>カ</sup>火<sup>カ</sup>その利<sup>カ</sup>むかとづくよ歎<sup>カ</sup>大  
休<sup>カ</sup>武<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>自<sup>カ</sup>炊<sup>カ</sup>獨<sup>カ</sup>焚<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>冥<sup>カ</sup>く座<sup>カ</sup>傍<sup>カ</sup>  
小<sup>カ</sup>室<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>神<sup>カ</sup>火<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>炉<sup>カ</sup>を設<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>黑<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>め<sup>カ</sup>烈<sup>カ</sup>約<sup>カ</sup>を  
其<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>和<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>押<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>炉<sup>カ</sup>を設<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>黑<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>め<sup>カ</sup>烈<sup>カ</sup>約<sup>カ</sup>を  
不<sup>ハ</sup>居<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>ゆ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>酒<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>念<sup>カ</sup>の大<sup>カ</sup>本<sup>カ</sup>  
お<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>火<sup>カ</sup>代<sup>カ</sup>穴<sup>カ</sup>そ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>造<sup>カ</sup>風<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>數<sup>カ</sup>全<sup>カ</sup>妙<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>

れりすと御多歎嘆もあらずりと可まぐれ座  
を欲すと云ひ不可まぐ一通と書すと奉へば  
べしニコ

○連棚 袋棚

連棚袋棚とてお世へ傳へる民ぞよびけぢ  
ゑもえ年毛棚、月卿玄あのあく没経よおき  
客ちて正室の入来のとき、客の冠と上の棚と上鳥  
帽子下の棚とすゝある没とおと、や袋  
棚とておとえども上と下とおと入る棚と  
金枝玉葉の止ことさき御殿と段とあると  
天ふ章よ御棚などもを縁の袋と入る三と

天ふ入御のとき御侍冗談を勧て御先うあす主役  
せし方せし化かを活かすて袋と棚と入る三と  
リがス冠鳥帽子下棚と袋と棚と上とあると萬葉  
御能のゆすれの際工の様、御火二方よすすとん  
りくとんしきのとれとくとく彼御火方とくとく走  
棚と血筋とて望満を以て法名ぬむよほよこ  
とあんに夏よもとす

○薬の紋

秋山色おう云窠は奇クリと達ふ鳥の窠也天子  
の御服の御紋とすく窠ハハツモニえ鳳凰の窠  
とすくとて御手とて御名とて御方とて御名とて御

四五つゝの窠キウの黄キウ爪ハのやハと木爪ハといへいか  
すすきう鳥ハねくまゝ窠ハをかくするえんハ帽額カイケイの  
紋ハ窠ハをつけくまゝくまハことともかくと云ふうけし  
くまや多田義俊ハ没ハす後ハ窠ハを木爪ハの坊  
小ハさうと云て祇園ハの社ハの定紋ハなべ、すゑて祇園ハ  
氏ハ木爪ハを乞ハくまゝ大ハいらう様ハうてす、こゑハ本  
鳳凰ハの巣ハの形ハうか・丸紋ハと窠形ハと云、えまハ風  
鳳凰ハの大刀ハの錐ハ、鳳凰ハ頭ハの大刀ハ鳥ハ頭ハの太刀  
とも云、日本紀ハうどくハ頭雄ハの太刀ハと有ハ、上ハ下ハ  
医ハ下ハも用ハいりしハうすハ天ハあくまハ佩ハらう  
太刀ハと錐ハと窠ハ作ハく風鳳凰ハの巣ハもむせ

りの形ハを造ハりうく風鳳凰ハ天ハあく前ハくまハの  
んハ北ハ太刀ハを天ハあく太刀ハと云めえんハまく、風鳳凰ハ窠  
もじせうまくハうそハ法ハちハ怖ハめハをゆく天ハま  
裏ハを拂ハせ行ハのゆハまハ先ハきハ拂ハいはめハもく  
よつて此ハ太刀ハは洋ハ邪ハ氣ハをハあハと鷦鷯ハ  
せんハと云ハえうハ武士ハの出ハあハのあハとす  
祓國ハ素ハ益ハ時ハ尊ハ武ハ勇ハを司ハどハ玉ハよ神ハよ  
祐ハ祉ハ頭ハの笠ハとハまハくまハくまハ世ハの後ハの風  
田代ハ身ハの紋ハが窠ハもくハしれ行ハ去ハ紋ハの幕ハを  
祓國ハ、お所ハまんハしとハ祓國ハの紋ハうくまハと  
えうハうハのあハとすハ、えまハ行ハ出ハはハと先祖ハ

尾張國吉馬の後園の氏子と申すが、其地役を焉  
さんと申す者と申す。傳也。

○わ歌の左言

和物三鷹の市や家原宿山口四五松の肉育するつへ  
三年次和歌をかく哉うのま

せうどりに見てハ林庵のひも

雲立けのるみよゝの山

と泳游劇を乞ふてはも下りて山の裏に  
うと称考すこも又泳游ひにものとぞちるくに  
おさくらどめとゆゑとゆゑとゆゑとゆゑとゆゑと  
ゆゑあるおのゆゑとゆゑとゆゑとゆゑとゆゑと

入まくと卿猪ぬせア度一言よ越む青  
と折つんぬをと哥よとすずりにけよと役男  
を肝を拂しもとく點すう心附もと上ま  
とくまくまくはありもとととととととと  
とくまくまくはありもととととととととと  
と視りよと絵

云々と云ふと  
云々と云ふと

とゆほれどあらそとくとくとくとくとくと  
きはととくとくとくとくとくとくとくとくと  
りとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

さうなめハ西壽が也御山山口の  
落葉も枯葉も

○一休和尚有子

大日本史卷九十九列傳第二十六皇太子云僧空純有  
子為僧曰純復號岐翁居攝津櫻塚云

○土王

曆面の土用ハ土王王のよき面也土用と云ふ  
かくと谷重を奉山集と見えたる括宮節記

○刺史名也に獄の因名

佛子方便の窓元ハ心地也又名也也云ことも  
先に獄の因をとて名づけたる也王の不正代供文郎の

芦の斐う併し仕送り併の所めや刺髮也形の  
冥府と墮し拏まを立けし因干延也不如也全  
國傳も所承も本有てしてもももも也獄も併  
のキ人階セても併し併てして獄のよきも  
あらず名扁也也

○からし

堂上方の況ニ在住に又は朝廷衰廢之極ニモ  
給ひ所す矣棄せしめ、友めえんかりうやくとゆうり  
一死ノ町も併し浦川口シテまたく者林主つゝ  
入ける男禍の着物を衣ける、流石う女房のきみも  
得い先じ役男本丸へかちんえさんじは初ける

おもうこよもうんこし西子とくん  
歌賀と云、又源氏の家珍うんどつゆ、門をすり  
まく本所御後事

○寺のれ

故う多きを教ふきの鳥升あきをわづて能う  
此の花葛あるオの花もあくしをえぎらきを  
きけへんあくたまうふをめつめごとく、かく  
のゆゑをきく全上

○小町

牛馬門は竹風の以下はけての少河ハナ壁に於く、方を  
ほそのが根をたえての少河ハナ壁に於くもアメ、おもい

つめんがやのヤ河ハナ壁良家う姫、う河大仰のよき  
ハレ十河ハ、芳陸圓圓義是う姫也、源氏あん枝桑  
故事寫取よ河の事と詔書參考也、全上

○居士

長阿含、菩生居業、多積財寶、名為居士、普門  
品科註、居士者多財多業者也、又云、居道居山居財  
之士等、譬喻經、毘舍門、源氏、人高貴、市人の称呼

三合上

○武廟妓

古今譚概卷三十六、武廟歷一妓、毎行必從百官、咸賄以求  
媚、一日上侵晨從外入、妓翁而臥、擁被欲走匿、上從

其信疾趣曰免起、已而上去、ナ逃、忽聞門外鼓吹有、乃都察院送扁至、金書免起堂三字、金上

○田沼意次の送下

江都聞見錄云、主殿訃音云々全銀八人々舍もかくか  
たきほどの寶を手度を貯ても持てぬいぢに及  
と御かほどの人さんハ其志より患うること御さう志  
の原稿へ書代お書きあらうありまつりへーといへえ  
多く余日を登場へん國家のありよ甚すこ一刹もあ  
き心す。只近頃の内我邸の長廊下は落葉の音あ  
おひだりし候豆てどもと見そむくふとを壁するよリ  
リヒノアモシ

和あ水の源、一所の風氣を中和祝月のすすめ  
え貴様紳士のふくよい生あるを活て寛とれき且ま  
りえれ旅用女をえりす事よかく往すすくよん  
事よ略すああ、此旅かとみにあらううしてはくうく鉢  
舟をあやしく思ふもと、京畿近近くもせせすす  
はと鉢をえり、或う旅舟を田波く船え、ハ不甘じ  
方九石ば、えうきゆく、一り十廬を浮せん、よか判え  
算を、もあく窓、戸は、も板壁をすの木ねいは、主鉢  
第を柱を、也節と、庵と、主鉢を以て主石を、主と  
あす、生ああらう、青甘草、数株を植え、やう鉢  
鉢もつあけ、齋猿を附さしも是のみ流るま

の。う。乃。山。家。の。村。景。を。持。て。送。ふ。う。と。も。其。  
貯。め。り。侈。大。す。と。か。く。の。れ。と。も。

田。泥。が。廣。や。一。とき。廣。生。の。首。の。お。よ。あ。ま。で。や。を  
と。下。や。強。き。ゆ。め。ま。と。も。不。や。猶。窮。愁。愁。の。往。う。世。宮  
主。新。妻。の。收。き。と。そ。す。ら。傳。誦。し。と。ん。ど。や。う。あ  
く。う。説。云。

玄。裳。雛。衣。何。來。鳥。能。徊。在。田。或。在。泥。驚。看。一。朝  
特。二。離。一。刷。毛。梳。銅。在。雲。表。軒。翥。羽。俯。喙。恣。歸。還  
老。鶩。食。未。知。腹。果。然。已。有。稻。梁。數。萬。石。貪。琳。鉢  
课。間。架。錢。豈。烹。烹。狂。風。起。山。稟。次。去。一。拂。盜。人  
問。武。日。神。武。川。前。秋。如。冷。夜。鳴。聲。々。列。雁。班

鴻。丁。不。伍。庭。雀。笑。顧。步。熙。水。形。影。昂。大。離。曾。逢  
扶。渾。客。心。光。歸。嘴。供。咀。霄。翻。未。足。鍛。不。能。飛。  
翅。如。車。輪。不。能。搏。長。吟。空。訴。鴈。於。浙。七。星。在。天  
夜。漫。々。

キ。ニ。カ。は。キ。ミ。セ。シ。ト。ア。ク。イ。二。離。ハ。山。博。キ。と。孫。龍。助。の  
こと。在。室。あ。は。吉。次。父。子。最。窮。よ。そ。と。稻。梁。數。万  
石。八。千。セ。石。を。飭。さ。し。こと。方。深。間。架。錢。ハ。歌。色。全  
の。活。を。没。け。て。鄉。方。ハ。石。ニ。十。九。多。町。方。ハ。十。万。三。多。を。達  
一。こと。祚。武。の。前。の。二。句。リ。曲。泥。う。邱。ハ。水。田。稻。の。ゆ。う。あ  
六。年。八。月。よ。敵。を。す。と。そ。と。一。間。流。と。そ。と。一。と。大。離。曾  
遇。の。二。句。リ。よ。山。博。キ。と。う。佐。ゆ。る。え。と。れ。と。と。孫。龍。助

如馬とかもまを死をしてとすをハ田泥の家近  
北山のとて以人の作るに(二)時々田泥がことよ宵  
合さま元も地没とすやうきく小言山海經  
徳川太宰記

○夜食ナシ

元正間に於柳深のことを以て云進人をも、行蔭  
のみお食と進める所あるたれあつて明字です、  
悦べん去と多く満切の聲あつと聞る。勝はる程を  
えける是を海すを詔大元我おもむきを進すべ  
とと思ひく、お食を御へ進あす。御もとぞやまと大  
名のいはんげふる萬葉大名をむかひと見て多か  
同トお食あらずきとくを全のことより杜布に夜食

代まうこ近あし向うともぬあらふと云々と指をも夜  
令代日除を貯まつ羽守ありとく氣うけす成え  
方と悦ひ往々又は少へて地方より心遣ひす  
代まうをせひなみゆく入ぬことどうとこ見ゆ  
あ夜往々ちよしをす代おひた、一キ、こと  
往々の人物津をむの内といふ者を曰ひ、般  
古事記の行トうき、こうさんとお代は野あと代便  
うち送り一ノ移ふすすめは田泥かすみを引い  
しきよかることありき、全上

○柳深の六義園

元禄八年四月廿九柳深お明宇、ゆき深井村そ

おまのに四萬セト洋を歸よ、こえ後ま山林あるの景  
はとかまく六義園と称し玉え上皇御駕詔をたま  
ひこせよ名園とぞぞややもしれ也。同十四年四月廿日桂  
昌院尼公極はが深井の別業ヒ六義園スコトセモ  
秋え但馬守はしめ數人佐多モテヒ明字あわせみも  
引つむはあけあまの御密應しまる。國中  
シカレニキ志を説り、さまくのれ、さくいざく作と  
坐は備へテ又あまとたとう珠綴書棚秀且文  
房の品を思ひく。献ト賜めからず多く。ゆうせう  
そくの國中ノ引肆。玉あの大正元年十一月  
十二日移入。改名する。ひひ弓削七手をとて  
てし元移入。改名する。ひひ弓削七手をとて

献トヒニキ志。その國の皆持せらるゝをひて  
こ半切。こまく六義園の御称。し館と六義館  
といふ射場を祝徳場といひ馬場をす雪場といひ尾  
山門を久復山といふ。もみえ八十八棟を没け一  
と三。其えを様やす和訓する北村季吟の名づけ  
一。よの漢詩。もく御待の令。しもとも細井廣宣  
のちもともくもくあら北國を行きもととまよ太ハ本  
心大根細う穿うありて通して石川筋。橋もと上  
ケ。運搬。かく。石の大うも。ちさへ九尺。ふよもあ  
う。こを。移く。斯う人の役支をあらへと。國や  
の仇。わざあ。以上。度の風景を模し。池の千川

上を引金を渺々と山の奇石怪岩を聚  
めを率年し紀三井寺布引の松、玉津島、五株の松  
とて金木多の松、似たもてひねるえ遠モヤシ福、植  
ゑ木木くはまに辛波の中、お堂を池十へ作れ  
ス拵へしもむぬ也、かくのことくまに坐もんと巨あ  
譽、御を愛しどんと思ひのお、大石巨材以下ろ取のわ  
ことくくあひす詮えを焼り除もよみよすとよ  
以て羽林高きの日權力の國へとくことをひそく  
隠すて時々一更、羽林退院へぬくをす牢をセ  
しか武ほとまく辛さんけべ北山を媛み一間四尺  
ハ何石とよも、うしてまん白、朱天の浮き畢、竟林

瘞誰是主、主人未少客未多、といふは行ふ然う惟  
ノ後ハ岩ゆぎの所多ゆゆく、上

○神を月

おも隨事に金井義豈神社今之の歌すよやあ  
を神古トゼ以テ神を月也

萬葉抄

○喜子の歌

牛角の歎の歌あるまうおを祝もしめしよある不秀  
一叶赤拂火の事多うおあひ、うやんことまき家み  
生ん後いて乞うとすくふ祀うと云しの文政  
土一年二月和より年三月廿九日がはく間町の大  
火の御の邸も悉く燒きて江戸の中よ一か所も住

のもよき事なりしこゝに於ておもひて首をもつて仕入間  
不火ノ御ハ生糸を産す處アリテ此處も長おまえ  
九郎ノ船を加セシムと

○松平三翁の奇鳥

松平三翁奇鳥アリシテ川原の木に松、柏、柏を生ト  
葉を落す者アリ松柏皆之より所欲の如也。之を  
詠ヘケルハ行路下りテ一臺の傍何時とも止む此  
る道へこれを捕りメテ之に飼ひテ一月捕れ  
數る者之の毛をぬる乃ちキヌヒニヒキを土下す埋めシメ  
ミキモト行を穿て見んハ幸也。ことく松脂と  
化松る所の松脂を獲ラシテ

○大膳監はまゆの傷だるせ

谷文晁西遊ヤーとき、大膳を訪ヘーヨ。二年と半ち、沈  
み落し方子披衣、て對面する。すたまう仕合  
既く、あらうにきもと、うそりあひのほりうる、かく  
のめくさんと、生瘡あまくしてゆく、やうに移變  
のすとあさる。殖於丈のものあるえを、萬葉ノ文  
んことを乞ひ、大膳深しけり、其をせしまくみ  
を乞ひ、やうに大膳より御内侍御、御納す御内  
侍もとある。うそりうそり、あく、ゆくゆくゆく、侍を考  
し、侍を考し、と申せよ。正清遠所、従たり  
と申せよ。文晁内侍氏にありことをゆす

五あると揚て善き事を以すしをもとて文尼也水  
弓心と主な在御ふ清きかきとともありけり  
徳也あらうやつまちくすといへと

### ○庸 医

漢書云時は疾をひけて病ありて治めざる中医をひ  
そりてすのよきせよらまのいのくにんじゆも  
さるをめこんと服ひかて病と多くするもけんぶ  
病もん瘡瘍をもと中の毛をひどくもくる也正  
被うて毛をそつて紙を包ひし毛をすりより  
人を負ふとひへ薄きもすりや はのえ はのえ

### ○柔術のそしり

拳りとの世所謂柔術を武備志と是を拳と云士などと  
博ヒヨリ本ニ有ムノベシ世陳元寶アヤシと云ふの我國ニ來  
リを江戸浅草の圓正寺カイソウジ高寺又源丈和尚セヤセヤもつ  
破目ハマツメ太もも三浦占次本半つと云ふも三ノ同トモノ彼の  
寺も高石も亦廢カツあへう元脛カクからして大歟カク立人をと  
くの術なり我を術をひそむといふを伎を道  
つと云ふ在三人の士を術をゆき、自ら其伎を二本一  
て後よりもすり重タテ凡柔術のあうり三人  
をひそむる云々拳法極カクたゞく全上

### ○足屋

足屋宿禰

舊事記を據るまよ神武天皇山摩之麻政命を記し

給の事すを記すとて所ゆゑ宿とよつて是  
庄と号く又にちと六月宿稱余三見春福余有あ  
天皇の御世より是處を元は是庄とす  
次と移稱とすと太神と名きす。全上

○掃部カレハ

古時於造日、豐玉姫命<sup>ミタチヒメノミコト</sup>激尊<sup>カツサナ</sup>誕育<sup>タツブ</sup>於  
ウニ海源<sup>ミツナガシ</sup>を立つて、以<sup>テ</sup>掃守<sup>カレハシタ</sup>の連祖、天忍人  
余供<sup>ミタチヒメノミコト</sup>作<sup>ス</sup>而解<sup>ス</sup>を掃<sup>ス</sup>ふ。仍<sup>テ</sup>鋪設<sup>カツシツ</sup>をま  
つ<sup>ス</sup>。此を職<sup>ミタチヒメノミコト</sup>也。其を解<sup>カニミツ</sup>守<sup>ス</sup>と云。注云。今<sup>ス</sup>の仍是  
を掃守<sup>カレハシタ</sup>と云。ハの内<sup>ス</sup>の跡<sup>ミツ</sup>也。全上

○妓

古<sup>イキ</sup>之<sup>ク</sup>と妓<sup>アマテ</sup>あり。漢武帝<sup>ハニ</sup>を是妓<sup>アマテ</sup>を以<sup>テ</sup>軍士  
の東<sup>アマテ</sup>と<sup>シ</sup>と行<sup>ス</sup>し。其<sup>ノ</sup>と書<sup>フ</sup>が<sup>アマテ</sup>注<sup>ス</sup>す。

全上

○美男破丸

此<sup>タ</sup>後<sup>タ</sup>圓<sup>タ</sup>ある。又<sup>タ</sup>此<sup>タ</sup>の四男<sup>タ</sup>もと亦<sup>タ</sup>一<sup>タ</sup>充<sup>タ</sup>生<sup>タ</sup>  
の陳<sup>タ</sup>をす。又<sup>タ</sup>用<sup>タ</sup>の志<sup>タ</sup>を破<sup>ス</sup>。すと云。全上

○セタ

桂陽城<sup>カイヨウジ</sup>の即<sup>テ</sup>と云<sup>ス</sup>の仙術<sup>アマテ</sup>。其<sup>ノ</sup>ホ<sup>ス</sup>渭<sup>ス</sup>云<sup>セ</sup>月  
七<sup>セ</sup>日<sup>セ</sup>城<sup>アマテ</sup>。又<sup>タ</sup>天河<sup>アマテ</sup>を渡<sup>ス</sup>。オ<sup>タ</sup>闇<sup>アマテ</sup>を御<sup>メ</sup>。ハ<sup>タ</sup>何<sup>タ</sup>  
事<sup>タ</sup>。う<sup>タ</sup>河<sup>アマテ</sup>を渡<sup>ス</sup>。天<sup>アマテ</sup>の<sup>タ</sup>風<sup>アマテ</sup>の志<sup>アマテ</sup>と<sup>シ</sup>牽牛<sup>アマテ</sup>  
シ<sup>ス</sup>。漢<sup>アマテ</sup>の<sup>タ</sup>世<sup>アマテ</sup>の人<sup>アマテ</sup>の<sup>タ</sup>も<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>鐵<sup>アマテ</sup>の<sup>タ</sup>章<sup>アマテ</sup>生<sup>ス</sup>。

すと云後齊ニ龍祖法記の事より一齊記又  
ぬまう武丁トウ妻言トモイ度タマ協アモ志シの乘槎スルカの法說  
るをかう御ミサムひと身ヒトコトのよめヒメ人ヒトみのよヒメのよヒメつて口ヒガえとす  
トハすと天アメ人ヒト墨土モクドからむ事ハシメテト天アメ上の列宿リツソクを  
も枝ハシ一ヒナすと活氣ハキの名メイを被ハシメレしもとヒトコト又アリやハむ  
へやヒヤのをもとヒトコトと活氣ハキ消ハシメと云ハシメテ今上ヒタチ  
めもとヒトコトを制ハシメす

○ものそりや

故坊記ハシメテ往昔陰康ヒタチ氏萬天氏ヒタチトヒタチ社ハシメ九氣ハキぬと  
今ヒタチのヒタチあたヒタチくヒタチす人ヒト玲ハシメ也ハシメとヒタチくヒタチ國ハシメ童肥ハシメの  
疾ハシメきハシメし爰ハシメ枝ハシ閑節ハシメと通利ハシメす業ハシメとヒタチアリヒタチムヒタチゆヒタチも  
めもとヒトコトを制ハシメす

○平家物語

日件錄

相國寺の寺量院の瑞溪作

卷六ヒタチ従者ヒト為長ヒトとヒタチの平ヒタチ家ヒタチ物語

十二卷ヒタチと作ハシメすと活氣ハキの性ヒトコト佛ハシメとヒタチの是ヒタチを  
言ハシメゆ上ヒタチセと活氣ハキすとヒタチ（は佛ハシメう後ハシメと如ヒタチ一ヒナ活氣ハキ、めヒタチ一ヒナ活氣ハキ、めヒタチ二ヒナ活氣ハキ、めヒタチ三ヒナ活氣ハキ）是ヒタチん臂ハシメ志ヒタチ平ヒタチ家ヒタチ物語ハシメを  
うながハシメすとヒタチ去ハシメ四ヒナ重ヒタチ及ハシメう白ヒタチ後ハシメちの波ハシメの行ハシメ唐前ハシメ司ハシメ  
行ハシメ長ヒタチ入ハシメ道ハシメ平ヒタチ家ヒタチ物語ハシメを作ハシメと生ハシメ佛ハシメとヒタチいヒタチ育ハシメ目ハシメ  
とヒタチあヒタチも計ハシメとヒタチけヒタチ、彼ハシメの生ハシメ佛ハシメの生ハシメつヒタチの爲ハシメ、と今ヒタチの  
想ハシメ碧ハシメ波ハシメ、とヒタチいヒタチくヒタチ（此ハシメ說ハシメとヒタチとヒタチへもとヒタチる）  
全上

○年忌

十三年忌ハ圓供をやぢ十三支後も又既に先支を迎て  
追慕を除まつて元喜釋すと見づくさむを何のひう  
めもすと詳るモナサ納ヘ代西う十三年忌を攝河中納  
言えんを修さんとせむ女房の徳高麗の日遍因素セ  
さうりとや是佛か本況ちまくすまへてまど  
併家ハ四十のうへ止むすは傳焉の事也を傳也年  
忌とまゆりと好ひて釋瑞氏味圓寺一切行を捺閱  
して曰く此經の内3年忌服忌の事もこれ  
か主佛高僧伝記を傳て用之と云ひ合上

○印版

日本三才圖會を板ニ刻ムトミムかとひすえ文三

山門中状ニ法師坊が所造持一擇集者清方法書也、天  
下不可止置之、在々所々所持并其印板大講堂取上、  
为報三世佛恩可燒失之由卷聞仕徒畢とあつて  
を以て見んべ此乃已ニ送様集を版行セテ然ハ古義  
を版りすも新、ナ前之一キ世トロイケテモリ  
又夢窓圓済の弟子の範も圓寺の祖也夢窓多  
く伊吉詒集才を極る刻ム多くハめ能う迄可  
えう、も彼版のことくく備えふすかと石傳と  
りア師直う板りセテハゆきう経ち又美流の瑞  
龍寺も版す地お、閑山寺もと閑山版を聞

さへう肉防の山口より往きらも販あり長門の寺  
積寺より三手前板の板を入角食は市太奉の役より  
記及活の本を出版すと嶽嶽寺と云ひ是より杜子  
美の文家注と足利本といふものやうあるす徳芳  
朝鮮は便よきとき我圓の紙をセレと板をする  
めどもと程版改うふ註附注と朝鮮をセ  
版わざりせ世の板印は其まち庭訓節  
用集をよしむりくらう充てんとくにじとも多く  
うみとや心保のまちいよく多く成る所  
あそひゆく全上

○大正藏の文庫の文庫

西田文庫とらぐる古保の中領市中まで數多のの  
を得て之をすねうがいつう台聽より城前守  
名あくとテ術を訥み城前守乃ち文部省とて  
約り日と二つ刻めいくつぞとてう文部省もと  
西田文庫とてはまのまよ向小算盤をあしゆる  
といふは名古と算盤をおまへとてう文部省  
守の事より也又算盤を上下へうるニ二天作立と  
とて五手前板の板を入角食は市太奉の役より  
三手前板の板を入角食は市太奉の役より  
皆のねすとてはまのまよとやうとえをとてう天  
さかくとてうはとくとく勤むと後ろのほん、えを

差を傳へてすむとまことに御前守、<sup>アマサ</sup>手術を成せば  
すくナ体を覺えと爲あうしてまう。後日太平に

○南印隱候義利の騒音

府本町のをと住んで医師をよしよす。ある  
年のじのこと、或夜深けで門を敲く。ああ、何事と  
ぞと聞ゆれば、もとめお僧の病しほんハ及  
び本院をほんうめめす。あひたゞ深めの、轉が  
をまかうとまく何をかと聞く。江戸近キ、村屋  
より差ふさらはと、そこへの支度とのつて  
跨りお舞んへ。生徒昇せたり時計のことうを送り  
ておまかし。あれうなげと府あるやしと思ふ。

山間木立の中へ入へ行くこと凡て里組さう  
御くらえ室あまかのくちまくとくぬ大ももをむ  
の体もと瘦くとて革筋をせま。何ん言ふかとハ  
あむさうあるのものや。でも、活けりぬせす。  
長六尺の組み大さきあ三尺、徑り五尺ハ  
やう。大火鉢とおせうらの余をおせし一日し  
いた。婦くちに河口ちもあきこ。市人のすみ家々  
ちあくす、あら山城のあうかあくんといとせしけんも  
今けどすくまやうもとく良あうてやまくし。ま  
うえのまの歸る跡の跡の跡の跡をいたさ  
およい鈎網をまとへまくまいとあさくを先づ

う、うとくまきを盡す事なくやさしきへねき  
「セー」とみめぬるあはう、あらはうめみは年、ハ  
タゞ前うしのじにひきづ今あることをうなげ  
み強く催しけりるよろこびことをくじやへうは  
やく珍奈一きかとあはれ、やうせせんむらぬが  
めふと見え肩のうつくしきとせまえとあはぐ  
も之とぬ美へうき立ぬぬくと肌わう試み  
スは後すううてあはる高うともりえぬとまわ  
清早は東ニ三貼を仰御しとぬモとまわ  
ハ恥のいふやう行う子あせびもてすまゐを  
あくもわやのことをメテうきはげつけられへ珍ら

「ううすとも後まつた木と自らゆきと下部の男  
して酒を抜くああしとよ町はと行けましゆ  
消えて下部へいつともう生ぢ、かくよろ密の方  
方ういとく酒のみだらのあまへをかへキひじ  
噴うたいとくまゐまう俄うまきみをと  
てあらへーの言ひゆがへかへと考ひ木  
おさおのみかよいが、おも着しほどりあがこう  
ちくわがは湯をたどりとおぼくも制とえひゆ  
お裸とくらしてだやき、いうううきめをうり  
人と間まくちやく前の下部又火大とほへす  
ふうのすまつかだまへあとこうのひととあひ

きをこの内を如経をおぼえず後下印さらばするまゝや  
こそあん我あるすまゝもまゆゑをゆゑをも見  
すよ度うる湯石もあんとえやく所うとあらえ  
とすま入の、せあんと量をもおれどもお車のこ  
お車を表すも幼後傍みの御もことと見て  
きよりみすう送めりあみわせくすお車をも見  
先のを始めゆきまゝよを左し引いよのを  
あまと始めてソヤシゆう徑へと又轉るおのをわ  
まる附けぞれ本川のあひ送うてしよりの豆あ  
ぬる豆あす打焉しよとまのぬ又能者の  
ト一も思ひてくへきく夢のぬく現のぬく

みりやうれんこのやへ行キ一とも思ひわうすにゆ  
てあきくもたううう比ことおきをもくかえて  
珍うきこといはせしう一二の花匠とは  
いかして湯んげんがの正めとだふらうせしむす印  
てすあとの隱候の神をもし続りし業あうとむか  
ぬ後方より席すま印板のトヤシキ火鉢お出で  
男の年ごろ毛をふし角力、女あとさうこせぢに貰  
めとあつてとくに此段のみ草し板食共のま聞  
きしとまく草の正の邊地づめとせんじ板  
尾の山の往けりかくと用ひさんとまくべ此無  
甲の奇兵利とし嘉永の印を退隠と麻

布のめ墅ニ閑居せん。う事より立れ奉とす。と  
シ郎中、婿家を没せしることゆえど  
全上

○上様おどり

家先公年高き折より躍をぬみ給ひて向ふも催し又詔  
方不る余しと家々とも呈覽せしとす。ことすく、是に  
未だ贈よといひもすけんべば。この家の少姓もとす  
あはする。さう一が月もに席う一般よ詠りしん。是  
を上詔あとうと云ふとさう。をまよ。元治十二年正  
月廿四日。伊達政宗。あそひ呈覽でし躍のことと申合  
申。朱三井。伊達政宗のことをもあらへ保拂てある。

の作を志めす。う、ともあり。御家二の丸うち松山閣を  
響ひしきつ數あれど。母の長老、毛利秀元。今大路  
道三相伴て奉と飯と。と代し。次第。支度。見酒。高  
をいふきつひ申。宋あり。後ある。やまと。ゆめ。大文。旅  
本。また。御家のお士道。翁。内内平をあつ。お年ハ  
本多。左近をもつ。三重。丈は。七情勘。六勘。す。砂ハ  
極。生。但馬守。言。事ハ。御家のかく。梅。サル。を。あつ。江  
口。毛利秀元。五萬。か。筋。成。道。本寺。水。井。向  
守。東岸。モ。士。ハ。保。と。兵。内。ア。大。今。の。佐。又。写。件。移。守  
知。鳥。は。大。移。行。支。移。移。御。り。もの。海。沒。守。つ。の  
尾。傳。つけ。紀。世。左。近。と。そ。の。照。ハ。保。と。不。見。守。勤

めう狂てはすすり一考主元吉成役アリ也す。はよ  
公政宗ハタマニ申す。まゆも一役ヒシテすんけん。政宗  
思うどもを祝せたまく太鼓ともたもモ並ト引、  
きあひ是ひと役者と向てくらの方々内拜セシモ  
公方絶えもいやくと奉陪ヘシ。階上階下五  
石を大ナホモヒトヒテ引をあげてはめく。はま  
山家けらるるの間ヒマツト小刀をぬき毛爪を  
さうすう左毒とねむきりしをひそヒテ前ひ  
かやの役あへあむまくとあく。けや太鼓ヒ  
金あけねばおこまをの太鼓を打ヒメれど  
おましまで一棒をがたりこゑを喜びる投すて手

仕事と暇即の間を拿す。稿もすく押す。公の前よりまも  
あせしうふやく。あま味のよき役者よとくまほのあく  
リーヨゼル。公のよき役者。いぢり。も肝をつぶす。  
今もはよとく役者を見つけて。大きめんする。すと  
先い絵へ公宣。おゆ。先刻も太鼓の間ヒて。あ  
御はのよ筋。しり。物をよしもいじり。しり。とえ  
がとく。すと役義経もすと。あまをひく。こ。よ  
せだ。も。物はとんじ。すと。あう。と。まう。

上四

### 〇日光の大雪を

日光の大石もそく元和四年正月黒田忠次の歎す所す

まゝ領地元前より杉と石材を携り浦ぬを運びてあり  
川舟一般を載すること叶ひやうして一  
般又石一本を載せ、三の左右より船一般つゝをもあ  
い船三艘にて一本と運びするつゝとて其の上  
び満きよとせんじゆと修復役を載せ牛板頭をつけて  
牛のヅカセヨリ徐々之を曳て日光道へ修復業め  
りともばこびかたけねば厚板を先き、板々はみと  
めほしてそく上を曳せたる用ひし板はのえと  
ふてきの支柱をまた足代る用ひとし、さんと  
石を上とキムト日光道をもと來雜穀数万石  
を買集めこねをもとそのうえは積上げ勾配とい

く取れし其上を曳くに由りてのち未敷の間  
のよるれをもとく、やる手をもとくのよのうへのとも長  
の豆ひくをすり人力をもとくとせんじ  
じが替り身三十萬石をあせしとくとくまへの事す  
あそやう——全上

○ねぬ満太郎の狀

昌平年の儒者ぬぬ満太郎ハ人を純信といひ幕  
下英傑の士多く天保のまゝ儒者多く列し佐野一安、杉  
原心友、友也あひ、あらひのむの法あるとこもよあら接の  
ことをよみづせんべへ往寄りめりあひて信の傳を  
執とすと校舎を在て一言ひりゆくとくにけ湯

まことにすも源氏のまきハ油草すりぬき、禄室の  
腐雲を漬まることをぬけずと止み、とて純後  
帝より鉢と鏡と斧みやさすをもつて、う夜軍  
みみひこ木匠、其の事は多く天保も寝てを以て  
すけまつ三十丈あるもすみ代えんば木匠大す因  
し大八車二輪を以て走る度に純信極  
めを短視し、咫尺のやうとも并まずこと能はず、因て全  
く手に取れぬ。途とをよ黙らざる程を久へことと  
せん事より経て金くもあらず。かくことあへむ一の義  
秋を引て枝をよそりて、う徑あえらず、平原  
のむづけすが或とき逢ゆ、ゆり角のこ奉美楠を算

すましよよきい経て千獣よ獨へこととひれを急  
み袂を引けれへ純信まの人向て一禮、久しう候間  
をくく達ふぬやうよ清めあへおと牛鶴せら  
ねよといひてゐる——と云々（全上）

○の磨大火造事

大火記云、御本丸天守甚ひ不頃内、有面りて、す、六間  
石垣四方塗き、ゆき前々もし六面と喰く御用の金  
銀納り、大い法うぢ、之共御天守築成、年號、天守甚ひほぐり塗  
草一、三日御善清れり、前ノ此主一つとかたすり、火  
を修羅堂來セ、五十六人つゝて、三の丸主も引出レ

失詩る言を衆四人のまゝに銀座年あまを四郎  
とちむを五郎あまの詣買三の丸を金銀へ化  
中失不垣裡栗不の門へゆきに失て取せざせし  
失て持てん也主銀主の手貸す積り凡そ  
三る立十七萬あれ八百ニもあふず

至州より鉢山西年下古のは神心すの御寺  
丸文子を鉢山有てそのどよみ解けてて此  
えの唐筆を仰りまことは人長サカト人厚サ  
セ丁子数ハヨ鑄おぬ詩入日をおひだして  
申けれども母日を被ふきやうすけれへまつた此  
あをば爲せんけんへひや珍い先入冷やる

母目を以てすよ希日あまへしより衆之間にうけ  
も先づもあつてはるはるに仕事に溜桶  
一ツ怪しきりしもくあり業みるくあまう間  
又及そんも临ひト一つはるや元脚善を終る  
御勘定の役唐主の入目鑄おぬおいが、  
トドケても是とけりと狩りをまつて是れこと  
とは一つ駒計を以てすよ何を金みのあまこと  
をもと同れど公算すとまよ駒計をトドケ  
た鐵もくらべて切て母目をうけまつて是れ  
さくへとてかくまのやくしれく母目はうれむ  
彼鑄ねば母目とゆることの子後ま積りへ

一石を手前方鑄お仰が所も徳目よりと  
又云御持十文の刀通しの御釘一本の内を二つと云  
此西市之元申けた仕事、少絵いといふ御持更へ  
と云ひのこと、ふなまわと下さの持す服差  
ハ雑刃もありのへ、鍔もさよも釘もアリ心  
の宣て一腰の主め百足又ハナヌキ足を釘の代  
ノ用いんと怒えげんと歎みの代本高々極  
リ附子とす上

○待女花

蘭待女子種則香、故名待女花、宜男草是其比對也、又  
聞蘭不注女子膏沐手、虽香不芳 蘭言

○蘭 蕙

芸山谷云、一幹一花而香有餘者为蘭、一幹數花而香不足  
者为蕙、又以花聞正月者蘭、香清而雅、一幹七花、三  
四月闻者蕙、香濃而濁

八上

○文章草の山水分

嘗論文有得水分者、有得分者、子曉水分多、故波濶動  
盪、退之山分多、故峰峦峭起

日録拾文

○鬱單越

法苑珠林所載、長阿含經云、

須彌山北、有天下、名鬱單越、此云俱盧洲の從廣、  
一萬由旬一由旬四十里、諸山浴池、華果豐茂、衆鳥和

鳴、四面有阿耨達池、四大河、無有溝坑荆棘蚊蟲  
毒蟲○其地柔軟、隨足隱起、大小便時、地為開  
折、利已還合○自然粳米、衆味具足、有摩尼  
珠、名曰缺光、置自然金鏡下、飯熟光滅○有  
樹名曲躬、葉々相次、天雨不漏、彼諸男女止  
宿其下○人起欲時、熟視女人、役女隨至園林、  
若是父親母親、不應行欲者、樹不曲蓋、各  
自散去、若求親者、樹則曲蓋、隨意娛樂、  
一日至七、爾乃捨去○多欲者、一生數至四立、亦  
有修行至死無欲○有諸香樹、黑熟之時、自  
然裂出種々身衣、或墨或食、河中寶船、乘載

娛樂、入中浴時、脫衣岸上、乘船渡水、遇衣便著、  
不求本衣、次至香樹、手取樂器、並妙琴和絃而  
行○彼人懷姪七八日便產、隨生男女、置於四衢、  
有諸行人、皆指含歎、指云甘乳、充偏兒身、過  
七日已、其兒長成、與彼人等、男向男衆、女向女  
衆○其人前世修十善行、來生此洲、人長三十  
二肘八尺八寸、髮甜青色、齊外眉而止○其  
人無有衆病、壽命千歲、不增不減、余終之後、  
生天善處○其土正方、人面像之○顏貌  
同等○彼人余終不相笑乎、莊嚴死屍、置四  
衢道、有鳥接置他方啖食之

○唱荔枝

檀几葉ちの荔枝伝云荔枝熟時、負慣手登抹、恐其姿啖、与之約曰、歌勿輟、則亦給、值樹葉扶疎、人坐綠陰中、高倚斷續、喝々其已、走聽之頗足娛耳、主人謂之唱荔枝。

照代葉ちの荔枝語ち參觀す。

○高壹付車庭川付車

高壹傳也云庭川付車風月付車と云之付車のふをもち荔枝をその也付車と曰くともや付車と云付車禮而往車と云ふを以て名ふ者多矣庭川風月车と云状無く反報ありし礼をもくとも付車のするあ

事あると云ふ高壹付車と云ふああ元禄の以す御の  
訓蒙師娘ああ母と云ふ人の芳心と云ひ一帯のわ  
往來と云ふこといえんぞや全て一大店をひこ美大  
切ひをほくそな往くの付車と云ふもの也車と云付車  
と云義理をえやすれども義理と云うと云  
けり端あ衣あとちべきと着あと誤りういはれ裁  
縫ひをぬと縫ひと云ひす裁ひひせしぬと衣あと  
云衣あ姫着衣初うとの衣すと着あと云うと  
す此高壹付車りゆくに海がお自若とすと林大  
原木が開段セしゆく経を満く浦にても布滿包  
定云々言直法印う庭川付車、十一月の文、権侍

醫也、達訖一派之書二種、靡養其名譽、達者拔群之仁候と云、此文を古來より權侍醫と云ふ事ぬ多く歟也、又人權侍醫（權侍醫）と達者とし、歐至協子は醫、權侍醫と云ふの名目見之。

○聖俞子美右隣

聖俞晚年謝事、ト築滄浪之傍、苦渴于蘇子美相隣

○行述齡使

楊椒山先生喜行而惡靜、云行報遠、靜報近、行也忠、靜也

近諫

○以贊文

蝴蝶、終緯、蟋蟀、以贊文

○孔子墓

王充論衡云、孔子至泗水而奔、水为之却流、今墓東連伯魚、南連子思、塋中無荆棘、無鳥巢、

○蝶 蜂

道經云、蝶文則粉退、蜂文則炎退

○魔滅王

安祿山軍難中曾為圓向寺胡僧、名魔滅王（魔滅王）、（史記傳）

○荊公跋字

王荊公論戲云云、自人道言之、文則用豆、辨則用戈、慮而後動、不可戲也、戲實生患、自道言之、無人焉用豆、無我焉用戈、無我無人、何慮之有、用戈用豆以及

為百慮、特戲事耳、戲此三事、故又為於戲傾戲之字、  
楊戲山辨之云、自人言之、君臣之義、夫婦之別皆辨也、何  
用戈之有、禮之用兵、無非道也、以用兵用戈為宣事則  
先王所以交神人討有罪者戲耳、此何理也、余謂虛字著  
戈字、凡戲去非真殺機、迷誠亡詔勸未往一有以實  
人、非盡戈而何、以上太平清話

○墨兵 葉獄

孫樞以書吏為墨兵、又古人亦以史為葉獄、可謂重對、  
亦可異也、全上

○剪發為葉

嶺南古無死工人剪髮為葉、遂下令、使一戶輸入鬚、

不能置考責值、見賓表異錄、全上

○笑矣宇

菌蕈有一種、食之令人得乾笑疾、士人呼呼為笑矣宇

○好謹

郭忠恕嘗以荊崇義姓、嘲之曰、近貴、全為賤、攀龍  
即作龍、吳歎三個耳、其柰不聰、崇義對曰、僕不  
能為詩、聊以一聯奉答、即云勿咷有三耳、全勝畜  
三心、蓋因其名以嘲之、真儒者之戲云、全上

○立色鹽

續漢書云、天竺國產黑鹽黃鹽、道書又有紫鹽、  
今甘肅寧夏有青黃紅三種、生祀中、全上

○江綠

堯山嘗外記云、高則成六七歲、穎異不凡、隣有尚書某、紺袍出送客、則成適自塾歸、時衣綠衣、尚書許詒之曰、土水蛙兒穿綠襖、美目盼兮、則成应声曰、落湯蝦子着紅衿、鞠躬如也、尚書大驚異、称为奇童。

○橫土 立土

土性有模有立、閩西支模土、閩東多立土、故閩東牛蒡蘿蔔極長、閩西者多短、人可見土有模立之性矣、農人謂之立土模土、唐去亦有此語、後山談叢云、田理有模有已從原本、今間謂之立土模土、立土

不可稿、为其不停水也、」言贛云、田地有模土、有立土、西北模土、可以穴居、山西多窑房、即所謂陶復陶穴也、立土不可穴居、入不宜種禾、江南人有鉗土、不畜水、亦不種坤方可抄

○怕瘡樹

紫薇花、邦語謂之猢滑樹、謂其樹無皮、猿不能攀、人呼為猿郎達樹、謂其無皮猿不能捷也、其根搔其本、則枝葉徒動、唐人因之名曰不耐瘡花、又曰怕瘡樹

○藏冢

元迺賢金甚集載岳墳行注云守墳觀禪師至京請加封謚徵賦此宋將孟珙滅金捷迺金陵余庫士集溺秦檜墓上其詩云君不見滅金王珙誇曉勇、凱還兵薄秦家隴六庫溷穢積如山千古行人畔糞塚」風月堂雜記云奉檜墓在建康墓上豐碑屹立不鐫一字蓋古時士大夫鄙其为人並舉物議故不敢作神道碑及孟珙滅金回也葬於檜墓前所令軍士集糞而塗墓上人謂之糞冢一湖壩雜記云忠武王靈爽昭、牧人入其廟者輒病墓前四鐵人向在牆內游人溺而擊之、雷體不完、穢氣四散或寔其齋惠靈併分

屍檜移之墳外而擊者愈多云：今

○樂天墓

賈氏談錄白居易葬龍門山河南尹靈貞別醉吟先生傳于石立墓側相傳迺為火葬危酒冢前方大土掌成泥潭元迺賢金甚集載北邙山歌云君不見履道坊中白太傅留客高其歌辭歌毒至今三月看花人載酒去澆墳上土注云白樂天賜第屢遭既葬北邙勒余酌人至墳所者火酌酒至今墓前降地泥濘一嗟呼自唐至元無憲數百年走人澆酒以為故事、夫奉檜之墓迺為澆漏可謂雷壤也昔者則天武氏割王皇后蕭淑妃之手豆

投釀甕中云使二幅骨醉是妖氣所致不真  
骨醉也如向傳者真骨醉也

全上

○麪一斗為糊

順宗時劉禹錫于頤大樞門吏接書尺數千禹錫  
一夕報謝、綠珠盆中日用麪一斗為糊以供餌封

新語仙

○酒中沐浴

石裕方明造酒數斛忽解衣入其中浴沐浴而七  
告子弟曰吾平生飲酒恨毛髮未燭其味今日  
聊以設之庶無辱薄

全上

○急淚

宋世祖謂劉德願曰卿哭責妃將者當厚賞願  
應声痛哭撫膺擣頭涕泗交流上甚悅故用豫  
州刺使以實之上又令醫術人牛志哭責妃志亦嗚咽  
極悲他日有同志者曰卿邪得此副急淚志曰我兩  
日自哭亡妾耳

全上

○口吻生花

張祜苦吟妻孥喚之不應以責祜祜曰吾方口吻生  
花豈恤汝輩

全上

○阜蓋能与日輪爭功

韓愈刺潮州嘗署中張阜蓋惄而喜曰此物能  
與日輪爭功豈細事耶

全上

○赤鳳凰

趙后外傳云、后所通宦奴趙赤鳳者、雄捷能趨樓閣、無通昭儀。十月五日宮中故事上靈文朝吹墳鼙鼓、連臂踏歌赤鳳凰來曲。后曰赤鳳凰為誰來。昭儀曰赤鳳為姊來、寧為他人乎。后怒以杯擲昭儀。張良曰：「鼠子能噬人乎？」昭儀曰：「穿其袴見其私。」笑安在噬人乎。帝微少其事、以問昭儀。昭儀曰：「以漢家父德故以帝為赤鳳。」帝信之大悅。

○朱舜翁の日本游

朱舜翁ゆ化年久、一見しては御姿をも用ひし。かく言ひめりあつて、一り或へ金すゆふ何處へ行給ふ。

ひと間たゞ、あす元氣弱被者、うひやまと冬と入林す。海を内まゝ押草余をあらざりて縁を賜りしとき、御所持綿ぐんでと人を浮うべば、あるまきにさ也。

○蘭奢待

蘭奢待とよ名あらず。東大寺の夢あらず。ハ東大寺の文字を隠て名とし。とぞ。口上

○おきつ鮒、二高坐二房三茄子

或へるしやく後海をのせ鮒を生干す。とぞ。とおきつ鮒と称し。名の「さ」を「さ」に替へて「さ」の音を「さ」に替へて「さ」に替へて「さ」に替へ

列祖の在セモトキ奥女中のあきうとふーもの  
ありうても處うどとき生干甘鯛を献ーと御  
御よねい御よあきう鯛と御だあくしち名  
すくまうむせじきそよあきう鯛と呼よるのよ  
そとぞかくまゆか鯛多キシムモケリ又  
宋翁の御えーハセモニテナガモと謂ふ  
ことあり此御えー御へ後御と御をあくとキ初  
サヨの便夷くして教諭とひし實済とを傳  
のうきとテん連まづ一立すキト、ゆ千山と云ふ  
次ハ足す山と云ふ次ハ初共すと云ふとモ彼  
土佐へ足す山をメカヒラミ取ひしれどもク

アレハルと御り、生ま、三あ、月士をもとをよセ  
リと云ひては書くがき掛て歌ふと云ふ物  
すくまうむせじき全上

○小枝の歌

林氏云ナ枝曲藝も名人と呼べる者と云ひあわ  
キ歌あくしよき、傍にひよき、大祚其雅と云  
一僕人不濟のハ博山を笛を吹き下ろく聲を  
常耳、あ一西と逆ひ吹きと云ひゆ人あ、歌と云う  
一とくえんきノ歌、ハ博山笛をもの、雅俗の解、通へ  
よりすこみ似て、こと育母の拉枝山田と本村  
と俗事の枝、名手と呼ぶ、正教す、う山田の

よきとひもへるも深し本邦の天性乃あけんべ  
技あらゆるやう世人のより一日あす同慶の折り  
風とああと遊ふほす「とおどしまのあくをあ育  
傳ふ学すからむと山田はすまて禮キムシく終  
之と能す本邦の漢す尾も詔半も並深  
とのいげんに一寸のへんにあし本邦の技の山田は優  
れることをかしどうぞ本邦中年はすまち俗事  
故と第ある達つて、貨殖のとて駆りしが先ほの歴  
みた牛をさんと宋馬とじ買わぬ今、何によ  
すく奏平少ことを教説めよるどこのおど  
日り愛徳か集めれきへ残生をすと歎吟し

ばまくにゆけまゐるゝせあくきこと思ひれず  
かくまくの思ひりりとせ樂するふもとを被  
ぬえ祖中川國十ヤ此てゆの外印臺と云  
狂六とモアまのまのゆのゆのゆのゆのゆを  
ゆくとの見解古とおつ教へてゆを動くと云  
あくともすまうとせ在すとやまとくある人  
えまゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ  
ゆりハ格送ひもすかくまくまくまくまく  
こ輪すまくせしゆの葉まくまくまくまく  
申べてうどまくまくまくまくまくまく  
ゆりゆりかくまくまくまくまくまくまく

か不思議井と抱へ残すと急速で立てまし又あ  
後人ひよあきらをそととキね延アツト平伏して坐れたる  
事もさう遙れず河の傍方或ひまほりもとや仕  
業をこなす處去るゝ處ことより車船ら  
のゆびるあくシト上けゆかの早うと一すゑ  
遂達すとすい伸びるの際の能達すとくわ  
一日前まことにとくやの取手を此處にきてぢよ  
も閉口して中々その達達と思ひよぬかス  
くとくこときもとおもねねの運送の名前をすくすく  
御書き下りとまふ解説

○本世文言

或云世の子の福はほんと思ひてゐるよ  
か六十年前老母の文言こうしてあるもの  
數をきくうちにとくナホ済む解説を度て  
の奥傳るたゞとく誰入未だまつてゐる  
もあちこちんじ差き小納戸衆などなるの奥方  
御密傳の美てうしや破るやうと聞ゆる  
弄しけりとも仰りよあくまどもすやめある  
節候の凶念未だまつともせらうを御ひ乍  
すむものと見立ての聖也の才一を身のも和  
えんばれ崩れしれどもとまどりヤーを因み専  
るも亂れを明めやうと仰て改てすむおもむき

御用ゆえ次第下けんてくの事聖事とすよ。あ  
はれ事とをかくす事なぞは御前御大前御大  
聖事とある。あくび。佛事と仰。う。大  
前乃し。う。本事と。れると。う。事と。う。事と。う。  
れ。ト。あ。は。公。其。れ。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。  
大前海事と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。  
け。に。れ。次。事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。  
事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。  
事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。  
事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。  
事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。  
事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。  
事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。  
事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。  
事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。  
事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。事。と。う。

3より、と書く。以下、三行

つ田沼時代の名物

田沼氏の事としとく。諸家の御遣抜。心とおこ  
じくともとてすき。や秋の月。富士山と轉すと始  
め。け。あ。う。トと。執。向。し。と。中。式。家。の。進。わ。か。と。  
ま。付。屋。云。満。と。大。鑑。セ。ハ。せ。よ。か。の。野。蔬。  
を。あ。ー。ら。い。ま。袖。う。家。厭。蔚。ほ。う。柳。の。か。刀。も。ま。  
袖。を。せ。き。き。と。う。家。厭。ひ。ほ。意。き。の。所。が。世。又。田。沼。キ。ヤ。モ。ミ  
以。し。り。と。き。候。間。の。使。付。せ。ゆ。い。何。を。設。い。経。あ。や  
と。訊。ふ。苦。も。益。を。找。を。こ。ア。見。く。ん。ね。と。久。人。答  
一。も。二。三。の。ち。詮。家。各。ち。の。不。嵩。を。大。少。と。も。

持込ちましませぬ二日(ま)のももとあべにて、わがよ  
トもあいみへと云ふのひの風俗めをあけむ  
皆の勘定をなうる松平作主守あ井田前守をも云  
ゆす五の姫遣官事臺をねめどくより人取一茶の姫  
おきどくすらお枝を写もて範肢をうめきをえ  
をあまへて上者を人形としてとどきしと云又立物夏  
月の段情を廊であるううかかの小室哉下す陽き  
往來す御よまくめむる妻を附さしめ夜や向  
んのちよもくも情中うとうやくに泣ケテ一と  
や又子直の中の痴症うそのまよを婦よしより  
一と毛色うやかを心り天章を片付とめらと云

ちよりものまよを防じとまよを考証あくび

甲ふ有記

○諸侯貢遣の考証

林氏らふちともも權勢のへり貢遣をあんと四年の昔  
鄙多きことひそきことまよ姫ひの酒井家も  
前様を缺し大老を勤さんとき仙家も大同  
十挺貢うとび一挺を車一辆と御すをさうしと  
まよひそきの内江にと距海はよつて船すとゆくま  
以鉛馬車も伊万里燒に鰐四萬枚四萬枚  
猪口皿と凡腰具より陶器も用ひき見のわせ  
千人前までとまよひそきのまよ

の腰を供する所やうそゆの内無を用ひ多く敗換  
する二ヶ一へああんとく又すあ共の祖徳  
平左京元祐や強更に御看注を被るしよふ人の  
大夫もえりかへんしよふ人の  
奔走もありしが一りかがくお詫びを申候のとき何  
か追上と存さんも事々よく年々ひやうへく  
ちよす馬をぬまん役とありぬふ四もの銓  
ても追トおはす歟とどくのね渡るしにぬま  
奉きつら後おあいか修造即のほ使若と云  
銓を抜ぬくふけり折角のぬまんに中廻  
をもひる足ニ鞍つて其銓を抜キ傳若より  
りと即時よか即く章を丸もう用ひあらのめ

今あつてとさうせひの風雨の住よ成へアのま  
まよや船よもえよる事よいつのも云か  
| | 甲子  
木法

○夷族黒雷

世よ雷と鬼よもあよまやく最甚アキとあけ  
義よもよ者夜よとよ雷を防ぐあよみよをす  
セリシテモアカモキナ十席飯と鋪く上ニ櫛と拂  
ヘ拂と下ニもとの間の梁りよ布慢エ化モ天井と  
天井よねえ天井を生うキトス入縁弓の慢と生  
て支天井とよこよく窓の内引のものとみで陰柔  
のわうもせばくあるよかくはくもとくかくあ

バセタや止まきを極心の底下と天井板とすらま  
又綿をまく花こうはとて意うる、掛ひのまよ  
中あま屏風を圍繕し、ゆすりて在て屏す。  
被食ひよおとむえ人の力と迷ふるも博て屏  
ゆきへじやうの法をとも肉肉し并ぞもまよと  
がん妄没すあすす或人目めの達とすわ  
を惜もひに脚りあくまことうかく者動を  
不実のひ矢石のやへ出くまひまくや乱つりふ  
飯ソクムシとぞ思ひて、口上

○小轟写

鏡せりんや一ハ段ハカツハまよ怜情

夏木枝を折れ、志らふを抱くの方のまよと、ま  
かかひに方をまよひて、心を取よ抱くとまよと  
りそく打手にてうなづく事うなづくと思ひ、おれ  
おれよりまよのうなづく事は、抱くまよせらる  
とよ全上

○大奥の離

大坪大奥の清離ぐせうめくすく棚を設て床べ  
すくすくもくもく席上に観を鋪て並べ在りとまよ  
三月まゝ御見とおもふてゆめのまよ、市坊のくせ  
大奥のあらべる底緑あらべるまよくのゆだらもも  
川と浦原をも清らやの清離を匂あわる

おえせしへり法事いうちま難、公卿の形を作りし  
まじゆまよまんべとむよりを貴るべきものとあらず  
を上に引みたる事多民アマウシシテ

上

○宝村の跋文

仙きゆゆ宝村氣象すき人うしとひなは湯見とき  
りつも首のさけ方す。うけんぶ一日四席の人をうす  
きくすれに我すう首、宝酒ま入る三方ス勧セ  
て出できまうかふり。とやよとよきとらどくとまほ  
かくぬうりとあづりひび人口を開くと未全

○かわの詠風

かわのまふ風へやまへはくはくとまくゆ、大穴

のあう湾くましちかとあすの意のあす(きら  
き)くまをあくとまくまでうし印は考密摺(あ  
くしやくとあんへ行列をつれとて構引をくわす摺  
るゆくセニあすことの連うく化ふをきくとま  
たとくかうのれのあすも懸(けん)すもまよが先後の  
間挟(ま)の間故仕事とへそよ半もとす何とも御  
使先の象和まよ御く押足行商人もとすもす主  
てまやともす作はまよく金(かな)りと見てう  
薄(うす)くとまくとまくとまくとまくとまく  
町を林參(りんさん)と行進ふ地をもへゆく特(とく)と  
こたえの行列をもとまく経(くわ)れて此のか

州の先あとア行アレ後士皆ア行ニ供をえまし道  
をすまう度うて行ひテ參國の内勧とくともめりもさ  
ハキナキはもとあんくとそいこもじあるまこと  
モモ大もじゆへ居テ作成即ち大それの裡をむ  
きよよタリと木氏派の又四五以レヂテ競斗  
日を着テすまか庚ハ平御の競斗日ヨシレナラ  
スルナシ、やそのときも此こんへ極貴あるむかじ  
産往と絶ゆぬかもあくまつ御ニモアレデラヌトキ、  
ツメ折ニ着ヤ。全上

○氣り更

亮政左撰上邊の官谷風振ミ此西の國ニヤキニ先

三郎車の國ニヤキニヤモテ被獨を免せんレニ此の男ニ  
モヒサム岐シ國もの此ヒ上邊するも詮人目  
をつキ至ぢシテ之のとき谷風ヤワトニテニツ  
トナシリマツタと云エヌミ、行司則終お構あ  
凡とニ西方ニ崩を揚ケテ諸人皆不善る思  
ひ有風く思つテ而自モアヘタガク黒川、伊丹ぬゆ  
レヒトキモヒ行司よシ仕方をひそむ行司モ  
ヨヒ全般お構キモカウの而カセキアヤセワトア  
スマワタと云ふも亦うもあすリモモキモアヌ  
ト渭の如の筋近傍ミシテ旅人の船ニモモモ  
ト鳥の跡ニ於ケル也所ヒテモモモモモモ

あしとみの流れの下りて一もまく閉にあ面せしと  
ちよこ行司ハ志田山風とこそ七代を行司のれ  
実あ傳の家主を今細川侯の姓家七主上院の  
ときわざく<sup>四</sup>もじゆ行司と勤るとまうやむ  
川のえ田米良のお構を内々士うのよしと金子  
名ふとこ直す行司の御も云ひて候おのづこ

全上

閱覽室

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

